

**ヴィトゲンシュタインの建築に関する研究**  
**- ヴィトゲンシュタインにおける「装飾」概念について -**  
**A Study on The Architecture of Ludwig Wittgenstein**  
**- Wittgenstein's Philosophy on "Ornament" -**

石田優<sup>1</sup>  
 Yu Ishida<sup>1</sup>

Stonborough Villa (1926-1928) was built in Vienna by the Philosopher Ludwig Wittgenstein (1889-1951) and the Architect Paul Engelmann (1891-1965). However, there is no documentation regarding the concept of the building as neither Wittgenstein nor Engelmann spoke of the design theory behind the Villa. Knowledge of Wittgenstein's contribution to Architecture was mostly only known by close family and friends of the Philosopher.

In this paper, the concept of Ornamentation for this architecture will be explored by utilizing Wittgenstein's diary and correspondences with friends, as well as anecdotes relating to Ornaments which will serve as a testament to Wittgenstein's stance on the subject matter. This paper looks to clarify ideology regarding Ornaments for Stonborough Villa.

### 1. 研究の背景と目的

ストンボロー邸は、哲学者ルートヴィヒ・ヴィトゲンシュタインと建築家パウル・エンゲルマンが共同でウィーンに設計した建築である（図 1, 2）。

当初この住宅は、1926 年の夏にヴィトゲンシュタインの姉であり施主であるマルガレーテ・ストンボローが、エンゲルマンに設計の依頼をしたところから本格的に計画が開始している。一方ヴィトゲンシュタインは、『論理哲学論考（以下論考）』を書き終え哲学から離れていた時期で、小学校の教員を辞職し庭師として働いていた。そののちに、エンゲルマンとマルガレーテの誘いを受け、設計に加わることになる。

この建築の仕事に関してエンゲルマンは、「私ではなく彼がその建築家でした。〈中略〉私の作成したものではないと思います」<sup>[1]</sup>と記し、自らの建築であることを否定している。そうした両設計者は、この建築に内在する建築理論は語っておらず、未だ不明な部分が残されている。

本稿は、この建築の重要な鍵概念のひとつである装飾に関して、ヴィトゲンシュタインの「装飾」の概念を捉えるため、彼と親交があった人物の言説・手紙・日記から関連する事象を抽出し、ヴィトゲンシュタインの装飾感について明らかにすることを目的としている。

### 2. ストンボロー邸の装飾について

ストンボロー邸の主階の部屋の床面は、全て統一された暗い床石が敷きつめられ、部屋の壁面および天井は渋いオークルイエローに塗られ、各部屋の意匠が統

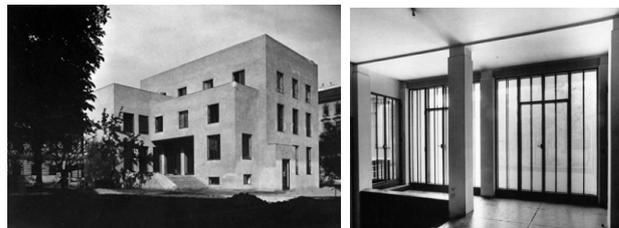


図 1 左) ストンボロー邸外観 (1926-1928)。戦後の改修によって、写真左側の公園は取り壊されている。

図 2 右) ホール内部。ホール中央に設置された階段を上がって入る。写真正面のガラス壁面内に設置されたテラスへ接続する二重ドアである。

一されている。またそれに裸電球、ラジエータ、ドアの要素が付加し空間が形成している。各部屋の内部を照らす照明は全て裸電球が設置され、その数はホール：1、朝食室：1、居間：2、サロン：3、食堂：2 となっている。ホールは、主階の中央に位置し朝食室より広い空間であるが同じ数の照明が設置されている。

暖房器具はラジエータ以外に、床には温水床暖房、ペリメータゾーンには床下からの温風の吹き出す暖房装置が計画されている。またその壁面内には、地下からカウンターウェイトを使用してせり上がる鉄製シャッターの装置が組み込まれている。すなわち、主階には最低限度に必要な照明と暖房器具、一方で大掛かりな装置は地下に計画することにより、内部空間の装飾的な要素は一切排除された無装飾な空間で主階全体が構成されている。

### 3. 装飾について I (マルガレーテ)

この建築が完成後すぐさま、施主マルガレーテこの建築に住むことになるが、しばらくして戦争から逃れ

1 : 日大短大・教員・建築

るためにウィーンを離れている。その期間この建築は、兵舎として使用されていた記録が残されている。

ヴィトゲンシュタインは、戦後もこの建築が本来の用途とは異なる目的で使用されていたことについて、1946年1月24日に三番目の妹ヘルミーネに宛てた手紙<sup>[2]</sup>に、この建築を家族で残したいことの内容が綴られている。また同手紙でヴィトゲンシュタインは、1928年にマルガレーテに室内装飾に関して、カーテン、絨毯、シャンデリアなどの装飾を取り付けることを禁止したことが記されている。またアラン・ジャンクによれば、ヴィトゲンシュタインを家に招くと「彼は壁に掛けている絵画を全て取り除くことに時間を費やしていた」と語っている<sup>[3]</sup> (図3,4)。

ところでマルガレーテは、1947年にウィーンに戻ってきており、1958年に亡くなるまでこの建築に住んでいる。

#### 4. 装飾についてⅡ (ピンセント)

ヴィトゲンシュタインの親友デイヴィット・ピンセント (1891-1918) は、トリニティーカレッジの学生で数学を専攻していた。またヴィトゲンシュタインの『論考』は、第一次世界大戦に従軍して戦死した彼に捧げたことでも有名である。

1912年7月12日のピンセントの日記に、ヴィトゲンシュタインと家具を選びに行った時に「(前略) 店員が私たちに見せたものの九〇パーセントに対して、ヴィトゲンシュタインは「駄目だーひどい！」と絶叫をした。」<sup>[4]</sup> ことが綴られている。また、バートランド・ラッセルはこのことについて「彼は家具についているあらゆる装飾を嫌っています。とって、そんな簡素なもの一つも見つからないのです」<sup>[5]</sup> 記している。

そうしたヴィトゲンシュタインは、理想とする家具を見るることができなかつたため、自分で家具の製作をおこなっている。

#### 5. 装飾についてⅢ (エクルズ)

ヴィトゲンシュタインがマンチェスターで航空工学を研究していた時に、研究調査の指導に訪れていた技師ウィリアム・エクルズと出会っている。

1910年代にエクルズとの旅行で同室したヴィトゲンシュタインについて、黒崎宏によれば「壁にかかっていた絵と部屋の飾り物をすべて片付けてしまったほど、飾りを嫌っていた」<sup>[6]</sup> と記している。

またエクルズは、新しい家のためにデザインをおこなった家具について、ヴィトゲンシュタインに意見を



図3 左) マルガレーテ夫人の居間 (1931年撮影)。左から二番目がマルガレーテ。写真中央にヴィトゲンシュタインが椅子に腰かけている。図4 右) マルガレーテ夫人の居間の暖炉 (戦後撮影)。暖炉の上部の壁に絵画が壁に掛けられている。

求めている。その家具についてレイ・モンクによれば「(前略) 彼らにそれらのつまらない装飾歴な部分を取り除くように言いなさい。それにベッドにどうしてローラーをつけるのですか。まさかベッドに乗って旅行するのではないでしょう!?(後略)」<sup>[7]</sup> と記されている。このことは、ヴィトゲンシュタインは家具の本質的な機能を優先して考えており、それに付け加えられた滑車でさえ、家具の余計なものとして捉えていたと考えられる。

#### 6. まとめ

ヴィトゲンシュタインの装飾の概念を考察するため、施主マルガレーテ、彼と親交があるピンセント、エクルズ、ラッセルを取り上げた。そうしたなかヴィトゲンシュタインの装飾の概念は一貫性を有しており、家具および室内から装飾的なものを徹底的に排除していることが明らかになった。

ヴィトゲンシュタインの装飾に対する捉え方は、ウィーンの同時代の建築家アドルフ・ロースとの類似性が考えられる。ヴィトゲンシュタインとロースは親交があり、共同設計者のエンゲルマンはロースの弟子である。エンゲルマンの回想では、ロースはヴィトゲンシュタインに対して「あなたは私だ」<sup>[8]</sup> と言い残している。今後の研究の展開として「装飾」概念に着目し、ヴィトゲンシュタインとロースの類似性について明らかにしていきたい。

#### 註

[1] レイ・モンク、『ウィトゲンシュタイン -天才の責務 1』、岡田雅勝訳、みすず書房、1994、p.252. [2] Bernhard Leitner, "Das Wittgenstein Haus", Hatje Cantz Verlag, 2000, p.30. [3] cf., Christopher Long, Allan Janik, "From, Experience, and Meaning: Wittgenstein and Loos as Architects", Wittgenstein Initiative, 12 May 2017. [4] cf., David Hume Pinsent, "A Portrait of Wittgenstein As a Young Man: From the Diary of David Hume Pinsent 1912-1914", Blackwell Pub, 1990. また、岡田雅勝によって訳された ibid.1, p.57 参照。[5] ibid.1, p.58. [6] 黒崎宏、『ウィトゲンシュタインの生涯と哲学』、勁草書房、1980、p.49. [7] ibid.1, p.114. [8] Paul Engelmann, "Letters from Ludwig Wittgenstein", Horizon Pr, 1968, p.127.

#### 図版出典

図1) Bernhard Leitner, "The Architecture of LUDWIG WITTEGENSTEIN A Documentation", New York University, 1976, p.36. 図2) ibid.1, p.55. 図3) Paul Wijdeveld, "Ludwig Wittgenstein Architekt", Loecker Erhard Verlag, 1993, p.41. 図4) August Samitz, "Die Architektur Wittgensteins", Böhlau, 2011, p.128